

漢法苞徳塾資料	No. 222
区分	治療論・配穴
タイトル	難經の配穴の原理について
著者	八木素萌
作成日	1990.01.28 (明鍼会シンポジウム；日本教育会館にて)

☆主題別の文字数

全字数	12,000 字弱	
脈論	6,000 字弱	
五臓弁別	3,000 字弱	
陰陽弁別	3,600 字弱	(内 脈論部分 1,800 字強、他 1,700 字強)
病症	4,200 字弱	(難～20)
治則:刺法	4,700 字弱	(難～31)

☆八十一難と七十五難の記述の問題

補瀉の決定は脈ではなく病証の虚実によるべきであると言う趣意の記述がある。そして、七十五難前半の取穴原理による「肝実肺虚」の治療を述べ、実々虚々の誤りを侵さないようにすべきであるとの戒めを記述している。

- (a) 従って病自体の虚実の判断の問題がある訳である。ところが難經には、これが病の虚・これが病の実と言う具体的な記述が無いので、種々の難に散見される他の表現による記述から、著者の考えを推測して、難經の言いたい病自体の虚実とはこういうものに違いない、または当時の医学思想に基づいて見当を付ける以外にはない。
- (b) 七十五難はやはり「肝実肺虚」の取穴原理を説明しているのであり、いわゆる「瀉火補水」の方法である。ところが八十一難の記述は七十五難の「金木水火土当更相平」の部分しか述べてはいない。「子能令母実母能令子虚」の「瀉火補水」法は述べていない。これはどう解釈することが適切なのかと言う問題がある事になる。

☆六十九難と七十二難の記述の問題

六十九難の記述で特に注目する必要があるのは「不実不虚 以経取之者 是正経自生病 不中他邪也」の部分である。四十九難の記述があるから後代に言われる「内傷病」であるのは明らかであるから、前段の「虚者補其母 実者瀉其子 当先補之 然後瀉其子」と言う有名な配穴原理は「内傷病」以外のものと受け取れる。

そうすると五十八難は広義の『傷寒』を論じているのであるから、此処に記述されている治療法則に

関するものは、「補母・瀉子」法と重要な関係がなければならない。五十八難では「温病之脈 行在諸經 不知何經之動也 各隨其經所在而取之」と特に記述している事の意味する重みがあるかと思われる。「内傷」を記述しているのは十四難中段の記述がある。これは正に「以經取之」が適応するであろう。『集註』の「丁註」の「肺—太淵」「心—少衝また中衝」「脾—欠落している」「肝—曲泉」「腎—復溜」の発想か、或は六十六難の「五臟六腑之有病者 皆取其原也」に拠るか、いずれかを用いると言う事であろう。後代の医学の発達、2によって、「内傷」病は五臟の虚が具体的に病として発現するには直接的に病因を為しているものが介在する。それが「飲」「痰」「瘀」「勞」「燥」「内湿」などである。これ等に対する措置と「虚」している臟腑を補す事が「内傷」病の治療と言う事になる。

七十二難が六十九難の記述と深く関連していると言うのは、「～能知迎隨之氣 可令調之 調氣之方 必在陰陽 何謂也 然 所謂迎隨者 知榮衛之流行 經脈之往来也 隨其逆順而取之 故曰迎隨 調氣之方 必在陰陽者 知其内外表裏 隨其陰陽而調之 故曰 調氣之方 必在陰陽」つまり「気を調える」と言うのは「陰」と「陽」とを調和させると言う事、「内外」や「表裏」を良く診てそこに在る「陰」と「陽」の平衡の乱れの度合いに応じて「気を調のえる」のであるが、それには「迎隨」と言うことを知っておかなければならないのだ、その「迎隨」とは「榮衛」の流れの状態を、經脈での「榮衛」の流れの様子が分からなくてはならない、と主張しているのである。もっと平たく言えば、病の「内外」や「表裏」を良く診定して、その状態が「經脈」で「榮衛」が機能している様子を把握しなさい、そしてその状態が病の「内外・表裏」の状況に対して「順」であるのか「逆」であるのかに従って取り扱うと言う事なのである。では「迎隨」とはどう言うことであるか、この問題の解答は七十九難に在る。「～迎而奪之者 瀉其子也 隨而濟之者 補母也～」と述べている、明らかに「取穴」による「補瀉」である。これはまた、六十九難と深く関連している。

☆七十五難再論；B

そうすると再び七十五難の問題に戻らなければならない。七十二難の思想は「調氣の方」は「陰陽に在」と言うにある。然し「取其經」にも「瀉火補水」にも触れていない。これは『脱簡』を疑うべきではないか？なぜなら六十六難の原穴、四十五難の「熱病在内者 取其会之氣穴也」という八会穴、五十六難の『積聚』論は、臟病の七伝の循環が次伝の臟の所で滞留している事及び初発の病臟は発病の時期や病因に独特の条件が在る事、に拠って積聚となる事を示している。肝の積（肥氣）→初発（肺→<発病の時期～季夏戊己日—*—病因として土性の邪と見られる>→伝へられた臟（肝；次に伝えて行く所は脾であるが時期が季夏に当たるので脾は肝からの邪を受けない）←伝病を拒む臟（脾と（=瘡瘡）言うシェーマである。心の積（伏梁）（初発臟腎・腎の初発の時期は秋庚辛日・肺旺気時期の故に拒伝=煩心）、脾の積（痞氣）（肝冬壬癸に病・脾に伝・腎旺気の拒伝=黄疸）、肺の積（息賁）（心春甲乙日に病・肺に伝・肝旺気の拒伝=肺壅）、腎の積（賁豚）（脾夏丙丁日に病・腎に伝・心旺気の拒伝=骨痿少気）等などと述べている。これは外感病が慢性化して痼疾化している所へさらに外邪が加わった状態である事は明らかである。傷寒論に言う併病の一種と解釈出来る可能性もあろう。正経自病の場合の問題と同様に単純な「補母瀉子」（六十九難前段）の取穴や「原穴」（六十六難）の取穴では不十分な事は推測できることである。

☆配穴に関する難経の記述

- ・「原穴」の治病的意味（六十六難）
- ・「八会穴」の治病的意味（四十五難）
- ・「五俞穴」の性質（六十二・六十三・六十四・六十五の諸難）と主治症（六十八・七十・七十四の諸難）
- ・腧募穴の性質（六十七難）
- ・陰俞穴と陽俞穴の関係と其の意味（六十四難）
- ・補瀉決定論（七十・八十一難）
- ・砭刺（二十八難）
- ・代替刺（七十三難）

☆ 腧募穴の関係性や五俞穴の陰経と陽経の関係性＝剛柔関係の論に関する記述

- ・肝と肺の関係論（三十三難）
- ・耳が聞き鼻が嗅ぐ事の臓間の機能相関（四十難）
- ・陰経の五俞穴と陽経の五俞穴の五行論的關係性（六十四難）
- ・腧在陽 陰病行陽・募在陰 陽病行陰（六十七難）
- ・金木水火土当更相平（七十五・八十一難）

☆虚実論とその関連についての記述

- ・尺寸での大過不及・外関内格・陰乗脈・内関外格・陽乗脈・覆溢脈＝真臟脈・不病死（三難）
- ・脈陰陽法・六脈・「各以其經所在 名病逆順」（四難）
- ・陰盛陽虚・陽盛陰虚・是陰陽虚実之意也（六難）
- ・寸口平而死・生氣之原者謂十二經之根本・呼吸之門・守邪之神ほか（八難）
- ・数者熱腑陽 遅者寒臟陰 故別知臟腑之病（九難）
- ・是謂実実虚虚 損不足益有余 如此死者 医殺之耳（十二難）
- ・色脈当参相応・寸口尺内相応・不応者病・相生脈相勝脈・上中下工（十三難）
- ・損至脈・治損法・上部有脈下部無脈・上部無脈下部有脈・脈有根本人有元氣（十四難）
- ・四時脈その大過不及・胃氣脈・解索脈彈石脈（十五難）
- ・脈の結伏と積聚痼疾（十八難後段）
- ・男女脈内外左右の所在（十九難）
- ・脈陰の部に陽脈・陽の部に陰脈・陽中伏陰・陰乗陽・陽乗陰・陰中伏陽・重陽狂・重陰癲（二十難）
- ・形病脈不病者生 脈病形不病者死（二十一難）
- ・三陰三陽の絶証（二十四難）
- ・聖人不能復回也 絡脈満溢 諸經不能復拘也（二十七難）

- ・榮衛の生成と循環（三十難）
- ・五臓不和則九竅不通・六腑不和則留結為癰・陽脈氣留則陽脈盛 陰脈血留則陰脈盛・陰脈榮於五臟 陽脈榮於六腑・其不覆溢 人氣内温於臟腑 外濡於腠理（三十七難）
- ・平人不食飲七日而死者 水穀津液俱尽 即死矣（四十三難）
- ・少壯者 血氣盛 肌肉滑 氣道通 榮衛之行 不失於常 故昼日精 夜不寤也 老人血氣衰 肌肉不滑 榮衛之道澇 故昼日不能精 夜不能寐也～（四十六難）
- ・三虚三実（四十八難）
- ・病欲得寒 而欲見人者 病在腑也 病欲得温 而不欲見人者 病在臟也・腑者陽也 臟者陰也（五十一難）
- ・陽虚陰盛 汗出而愈 上之即死・陽盛陰虚 汗出而死 下之而愈（五十八難）
- ・母子の補瀉・正経自病（六十九難）
- ・瀉火補水・不能治其虚何問其余（七十五難）
- ・当補之時 從衛取氣 当瀉之時 從榮置氣（七十六難）
- ・肝病伝脾故先実脾氣（七十七難）
- ・得氣因推而内之 是謂補・動而伸之 是謂瀉（七十八難）
- ・迎随補瀉・所謂実之与虚者 牢濡之意也・氣来実牢者为得・濡虚者为失也（七十九難）
- ・病自有虚実也・実実虚虚損不足而益有余（八十一難）

以下『難』のみ再録～3・4・6・8・9・12・13・14・15・18・19・20・21・24・27・30・37・43・46・48・51・58・69・75・76・77・78・79・81

☆まとめ

- ★十三難に「一ヲ知ルヲ下工ト為シ 二ヲ知ルヲ中工ト為シ 三ヲ知ルヲ上工ト為ス」とあるが、病症（臓象）と脈と尺皮の三つを全て知るもの、言換えれば診断上必要な事項の全体を良く知悉していれば、『上工』（つまり名医）と為る事を論じている。この様な思想が土台となっているから、難経の記述には診断に関する記述が非常に多い。
この内、脈論；6,000字弱、五臓弁別；3,000字弱、陰陽弁別；3,600字弱、病証記述；4,200字弱、と見られる。また治療の問題では、治則や刺法にかんするもの；4,700字弱、配穴や穴性に関するもの；1,700字強、虚実とこれに関連する事項に関するもの；5,000字弱、等となっている。
- ★ 診断と治療の問題で特に重要な『難』は、十三難・十五難・十六難・四十九難・八十一難であろう。八十一難では補瀉の決定は脈によるのでは無くて病自体の虚実依るべき事を述べ、十三難では色に代表させているが、病と言うものは五臓の何れかの変調を示す臓象と、脈状の意味するものとの間には矛盾があるものとして現われる事を強調しており、十六難では、脈状が例えば肝に問題がある事を指示していても、望診・腹診・問診の結果の意味する所が肝の問題では無かったら、「肝の病」と診定してはならないのだと言うのである。

十五難では、病の大過不及は季節の脈の虚実として表現される事と、それは「胃の氣」の脈の変調として表現されているものである事を主張し、四十九難では病因の持っている五行性と臓の持っている五行性とが並行して現象するもので、例えば心（火）に風（木）がある場合には肝（木）の主色の作用から火色である赤色が現われ、症状では身熱（火）と脇下満痛（木）が出、脈状は浮大（心・火）と弦（肝・木）とを現わす、この様なものである事を記述している。十七難の記述を考え合せると病の逆順が判断出来る事、また五十難の虚邪・実邪・賊邪・微邪・正邪の記述や五十三難の七伝間臓論・五十四難の臓病伝其所勝腑病伝其子・与七伝間臓同法の論等と合わせ考えれば病の逆順・伝変・病因・予後の判断が出来るものである事が判かるのである。病んでいる臓とその陰陽（臓腑）と病因と逆順と虚実とが明らかにされた訳であるから、内傷と外感および上中下・左右そして変動経が明らか（つまり病位が）になれば、八十一難によって補瀉の拠所となる基準が示されているのであるから、正しく治療出来る訳である。

★内傷は主として四十九難と十四難の記述に基づいて判断出来る。上中下は十八難中段と十九難に、左右は十九難と十八難中段に、内外は十九難・十八難下段・十四難・四十九難などに、記述されている。そうすると、後は変動経とその虚実の判断が残されるのみである。難経で三陰三陽の名義を用いる場合は、必ず経脈を指示する場合のみである。唯一の例外は七難にある一年の六気の運行における陰陽の消長とそれに応ずる旺気脈を記述している所のみである。その意味では十八難の上段の記述は明らかに六部への経脈の配当を記述したものと言わなければならない。十八難の中段の最後には「審ラカニシテ之レヲ刺ス者ナリ」とあるが、上段の末尾は「此レ皆五行ノ子母ノ更々ニ相ヒニ生養スル者ナリ」と言うだけである。つまり六部に配当されている経脈の性質が帯びている五行性の相互関係を記述しているのみである。『経絡治療』の六部の脈差診による虚実判定と言う事はこの記述からは直接的には出ては来ないのである。六部脈差診の方式は後に行なわれた工夫として見なす他は無い。

★配穴論や補瀉論に入る前に、十八難の記述と『経絡治療』の六部脈差診の問題について検討しなければならない。そして、その為には『難経』脈論が示唆している脈診技法は、どの様に見たら良いのかを考えて見たい。二難三難では関の部を境界に寸部と尺部の浮沈を取る方法これは十四難の末尾の上部有脈下部無脈下部有脈上部無脈云々の記述も同様なものである、四難は呼の時に心と肺をそして陽を、吸の時には肝と腎をそして陰を、呼吸の間には脾を診ている。そして此処には五臓の脈状が記述されている。また「陽」の脈状と「陰」の脈状の種類を述べてそれ等が錯綜して現われるものである事を記述している。七難と十五難は季節に応じて変化する脈状について記述する。五十八難と七難の脈状記述は傷寒論の脈論に引き継がれて六経弁証の脈法になっていると思われる。五難の菽法と六難の陰陽虚実法と十八中段の三部九候法および下段の積聚脈痛疾脈法と四難の呼吸法と併用されている浮中沈法と二十難の伏匿の診などは深さを種々に探って脈を診ている。呼吸と脈拍数の対比を診ているのは・二十一難の形病脈不病形不病脈病の論・十四難の損至脈論・十一難の不滿五十動一止論・九難の臓腑寒熱陰陽の数遅に拠る診別の論などがある。

つまり

- (い) 深さを色々に按じて探る
- (ろ) 上下や上中下や左右を比較対照して探る
- (は) 数と呼吸を対比して探る
- (に) 季節の脈と胃気の脈を脈状で探る
- (ほ) 脈状を探る、など等の様々な手法が駆使されている事が判るのである

こうして

- (イ) 五臓を菽法と脈状とを主として弁別し
- (ロ) さらに陰陽寒熱虚実臟腑を弁別し
- (ハ) 脈状と症候の分析から病因と逆順を判断している
- (ニ) 比較対比の方法で病位とその虚実を判定している

等が判るのである。これ等を概括すれば脈診は脈状診が基軸で、これに深さと左右上下虚実の対比法をも混えている事、病候の解析を本として脈による判断を対照する立場にある事、などである。病候の解析を主とし脈診判定を対照の為の材料として位置付け治療方針を樹てて病位に応じて施治すると言う姿が浮き出て来るのである。

★脈差診には実は重要な落とし穴があるので、この問題に触れない訳には行かないのだと思う。平人の脈は脈状において五臓の何れの脈とも弁じ難く、わずかに季節の脈状を帯びていて和緩であり、息数と脈数の関係も一息当たり四息乃至は五息という整った状態であり、左右上中下六部浮中沈ともに整っている。病になればこの様な状態では無くなり、病臓の五行と病因の五行の指示している象徴されるものが判別しやすい型で、脈状的にも部位的にも表現され、和緩では無くなり脈拍のリズムも数にも乱れが現われ、脈状も不安定になる。

これらの事が『難経』の記述から判かるのである。五臓の脈状とは、浮の部に肺と心の脈状が、沈の部に肝と腎の脈状がある、脾の脈は呼吸の間に在りまた浮中沈の中部に在り和緩（緩とも代とも言う）であって、病が在る時にのみ「胃の気」不足として触知出来るものである。

肺脈は浮短而濇“『四海同春』（明・万歴・朱棟隆）は三菽にこの脈状があれば肺は平であるが、一菽では肺の実、六菽では肺の虚、と記述”で藹々如車蓋按之益大と言う状態であるが、病の実には不上不下如循鷄羽の状を呈し、病の虚には気来虚微で、肺絶の死を示す場合には按之蕭索如風吹毛日死となる事を述べている。肝脈では平脈は厭々聶々如循榆葉であり、病実には気来実強で益実而滑如循長竿の脈状となり、病虚では気来虚微となり、肝絶の死脈では急而勁益強如新張弓弦日死となる。心脈では平脈は来累累如環如循琅玕の脈状となり、病実には来而益数如鷄拳足となり、病虚では気来虚微となり、心絶の死脈は前曲後居如操帶鉤の脈状となる。

腎脈では平脈は脈来上天下兌濡滑如雀之啄の脈状であり、病実には啄々連属其中微曲の脈状となり、病虚では気来虚微となり、腎絶の死脈は来如解索去如彈石の脈状になる。脾脈の場合は平和不可得見衰乃見耳であって来如雀之啄如水之下漏是脾衰見也と言う様に他の臓の脈とは様子が異なる。これ等を見れば、正常な場合には、肺の脈と肝の脈と脾の脈とは他に比較して弱々しく触

知されると言う事になる。この点に六部を比較する脈差診の落とし穴があるのである。尚この脈状の記述は『素問』平人氣象論第 18 末尾の脈状記述の文と非常に良く似ている。また玉機真蔵論第 19 の前段の脈状記述とも類似している。

- ★六十九難の「補母瀉子」は迎隨の補瀉である事は七十九難の記述から明らかである。これは効果の確認を要することが「所謂実之与虚者牢濡之意也・氣来実牢者为得・濡虚者为失」とある事は注目すべきであろう。
- ★六十八難の五俞穴の主治証はそれぞれ五臓の病証の代表的なものであるから、五俞穴の五行性は五臓の五行性や病因の五行性や季節循環の五行性に対応して治療的に作用するものであることが、七十難の春夏浅刺秋冬深刺・春夏温必致一陰・秋冬寒必致一陽の論、七十四難の春刺井者邪在肝・夏刺榮者邪在心・季節夏刺俞者邪在脾・秋刺經者邪在肺・冬刺合者邪在腎の論と六十三難六十五難の記述とを考えあわせれば自明である。
- ★八十一難の記述に三つの重要な点がある。一つは「補瀉の決定には脈を根拠とするのではなく病自体の虚実に拠らねばならない」事の記述、二つは七十五難の前半の「金木水火土は更々互いに平<正常>にする」と言う原理の運用は、「肝実肺虚」の様にもともと制剋されている側が実しており、剋する側が虚していると言うような状態、傷寒論が「横」と呼んでいる状態、五十難で記述している「微邪」の状態に、適応するものである事、三つには「肺実肝虚微少氣」は「肝を補さないで返って肺を補す」と言う誤治逆治の間違い「中工之所害也」と戒めている記述である、「微少氣」の部分がミソであろう、つまり病証論研究の重要性の指摘であると俱に「六部脈差診の落とし穴」として触れた脈状の研究の重要性の指摘でもあり、また十三難に言う診察と判断の中途半端さが「中工」となり、診察と判断との全面性が「上工」となる事の指摘とも繋っているものの様に見える点である。
- ★『難経』では取穴の補瀉と配穴の補瀉とが厳密に結び付けられている、この事は八十一難・七十九難・七十六難・七十五難・七十四難・七十三難（補者不可以瀉・瀉者不可以補）、七十二難（調氣之方必在陰陽）、七十一難（鍼陽者臥鍼而刺之・刺陰者先以左手掇按所鍼榮俞之処氣散乃内鍼・是謂刺榮無傷衛刺榮也＝これは七十六難の当補之時從衛取氣・当瀉之時從榮置氣と相関）、七十難（春夏者陽氣在上人氣亦在上故当浅取之・秋冬者陽氣在下人氣亦在下故当深取之～春夏温必致一陰者初下鍼沈之至腎肝之部得氣引持之陰也秋冬寒必致一陽者初内鍼浅而浮之至心肺之部得氣推内之陽也）、六十九難（補母瀉子は七十九難の迎隨補瀉の説明で更に敷衍されている）等の記述の全体を見れば明らかである。
- ★七十五難と八十一難の金木水火土が互いに平にする作用を持っていると言う指摘は、臉募の関係の指摘する難や、陽經の五俞穴と陰經の五俞穴との関係を記述する難との関係が深いだけではなく、剛柔関係論・陰陽五行論の論理的構造の質をどの様に理解把握するのかと関わる問題でもある。つまり相生・相剋はともに生体の動態構造論的な全一性の為の機能を担っている所の生体構

成要素の相互関係の持っている機能面であり作用面であると言う事である、言換えれば人身の全体としてのまとまりのある生活能力を正常に維持する仕組みがどう作用するか働きとして相生相剋があるのである。これは三十三難の肺と肝の関係を論じている部分・四十難の耳が聞き鼻が嗅ぐ仕組みを、十干の五行論と方位の五行十干とを用いて（論理符号の操作のやり方である）説明している部分・六十四難の陽経の五兪穴の五行と陰経の五行が相剋的な関係にある事を「剛柔の事なり」と論じている所・六十七難の背腧穴と腹募穴の関係論・等を、考え合わせると『剛柔配穴』の方法が出てくる事になる。後代には明らかにこの配穴法が成立している。

★八会穴の記述から運用を考察する問題～四十五難に「熱病在内者取其会之気穴也」とある、この「気の会穴と言うのは、腑会＝太倉（中脘）・臓会＝季脇（章門）・筋会＝陽陵泉・髓会＝絶骨（陽輔）・血会＝鬲・骨会＝大杼・脈会＝太淵・気会＝三焦外一筋直両乳内（膻中）の八穴である。此の処は腑＝陽＝熱のシェーマでは把握しかねる。陽の分に当たるのは「腑会」「脈会」「気会」の三会穴である。他の五穴は陰の分のものである。六十六難・六十九難・七十四難・七十五難等の配穴原理を、論理的に秩序立てて位置付ける問題としては、如何に扱うべきか？がある。陽分の熱は陽実であるが陰分の熱は陰虚であると言う難経では明確に述べていない論理に従う他はない。更に金代の「閻明広」が師の「何若愚」の『流注指微賦』に註して敷衍した『子午流注鍼経』に見える「躁煩熱盛在於内者宜取八会穴也」として具体化している考えを採用するのが適切なのであろうか。また六十七難の腧穴募穴は治療論的な指示が記述されていないが、これも後代の臨床的な活用の例と論理を採用する事が適当と言う事になるだろうか。

★七衝門を記述している四十四難には脱簡があると見なすべきでは無いかと言う問題
三十五難の六腑の臓との関係と基本的な生理機能の記述は「下焦之所治也」と三十七難に言う「五臓不和則九竅不通」と五十七難の「五泄」の記述等との関連を考慮すれば、難経の記述の方式から考えると少なくとも「下焦之所治也」の様な、或は五十八難の治則の指示の様な記述がなければならぬと思われる。

★一般的に『難経』も『内経』も『傷寒論』も、陰陽論・五行論の論理的な概念についての説明がされず、医学的な適用についても十分に説明されてはいない。故に『白虎通』『五行大義』『易』などを研究して、古典を読む場合と、そうでない場合とでは、理解の奥行に差が出る事になる。
相生と言ひ相剋と言うも、人体の全機能的な統合の為の内部的な機能でありアルゴリズムであるものとして、長い進化を経て形成され獲得されたものであり、その故に環境への適応と働きかけ（能動）の折にも機能しているものである。相生だけがあって相剋が無い事もその反対も有りえない。『長生』関係論が日本では言われぬのが不思議である。

★補法と瀉法の手技論についても『難経』には大きな特長がある。手技論の記述を見ると、「補」法とは体表で陽の気を鍼先に聚めて刺入とともに体内に推入れる事である、「瀉」には体内で陰気を集めてそれを体表に鍼で引き上げるか引き出して捨てる事である（70・71・76・78・80）、と言うのである。陽の気は浅い所に在るものであり、陰の気は体内に深く潜んでいるものと言う認識

(71・76)が前提になっているのである。手技は配穴の補瀉と厳密に結び付けられている事は、七十三難の「補者不可以瀉・瀉者不可以補」と、七十九難の「迎而奪之者瀉其子随而濟之者補其母」および八十一難の「假令肺実肝虚・微少気・用鍼不補其肝・而反重実其肺・故曰実々虚々・損不足而益有余」などを見れば明らかである。

★鍼刺と補瀉についての難経の考え方

- ・気の所在する所を刺す（正気・邪気）（70・74）寶漢卿（標幽賦～五門十変）
- ・陰陽を整える（72）
- ・得気が大切である事（78）
- ・若有若無若得若失（79）
- ・伝変を知って刺す事（77）
- ・栄衛を通行せしめる事（76）

★刺法論を体系的に整理する上での課題

- a) 臓腑の診別論～病証論・症候学・切診（脈診と切経）・治則論・経脈学・経穴学との関連
- b) 陰の治療・陽の治療・経脈変調の治療・臓腑の治療・寒熱の治療・汗の治療・二便の治療・外感の治療・内傷の治療・結胸、心下痞、胃痞、胸脇苦満の治療・萎えの治療など、或は八法に应ずる鍼灸治療の主題との関連
- c) 各種の配穴法の相互関係とそれらの位置を定める問題

以上準備原稿